

年間第2主日 A年

第一朗読 イザヤ 49・3、5-6

第二朗読 一コリント 1・1-3

福音朗読 ヨハネ 1・29-34

2026.1.18 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今、土曜日の午前中に隔週で聖書入門講座をやっています。その土曜日の講座では、昔のヨーロッパの聖書を題材にした絵を見ながら、その絵で表されている聖書の箇所を読む、そういうのをやってるんですけども、その絵の背景で——風景画みたいにして描かれていることが多いんですけど——その背景で鳥が飛んでるのが時々出てくるんです。で、その鳥が、鴨というかアヒルみたいなのが飛んでて、それを鷹が追いかけているっていう、あるいは、そのアヒルみたいなのを鷹が捕まえているってそういうような感じで鳥が描かれていることが時々出てくるんです。

それは、わたしたちの感覚から見たら、鷹にアヒルが捕まえられちゃうからかわいそうという感じなんですけども、そのアヒルっていうのは、低いレベルに留まろうとする人間の傾きを象徴しているみたいなんです。で、鷹っていうのは高いところを飛ぶので、アヒルを追いかけて捕まえて神様のもとへっていうか、上空に連れて行こうとしているっていう、そういうような神様の恵みを表していて、だから鷹がアヒルを捕まえようとしているのは、その絵の意味では、捕まえてむさぼり食うためではなくて、捕まえてもっと高い所に連れていくっていう、そういうような神様の恵みを表してるって言われるんです。

実際の動物だったら、低いところを飛んでるのにわざわざ上空に連れて行かれたらちょっと困っちゃうんですけども、でもわたしたちのそういう魂と言いましょうか、自分の中の一番可能性が低いところに留まろうとするっていう、そういうわたしたちを、神様の恵みがもっと自分自身の価値に気づかせて、そういう意味では——鷹が良くてアヒルが駄目っていうことじゃないんだけど——その絵の象徴的な意味としては、本当は鷹なのに、でもアヒルかのように思い込む、あるいはそのように振る舞い続け

るっていう、そういうことから、改めて神様がお造りになった自分の価値に気づくように高みに連れて行こうとしている、そういうようなことなそうなんです。

今日、福音朗読では、洗礼者ヨハネがイエス様を指して、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハネ 1・29) と言う——これはミサのたびごとに司祭が洗礼者ヨハネになりわって皆さんに御聖体を示して言う言葉ですけど——、まさにその言葉の中に神様の恵み、ご計画が全部凝縮している。

「世の罪」っていうのは、何か一人ひとりが犯す律法の違反とか法律違反とか個々のものというよりは、最初に言いましたように、本来は鷹のようであるのに、でも自分自身をアヒルと思い込ませる、あるいはそのように振る舞おうとする。わたしたちをお造りになった神様から切り離されて自分の低いものの見方に留まろうとするっていうのが根本的な罪。でもそうではない。目を開き、そして神様と共にあろうとするために、イエス様ご自身が小羊——というのは捧げ物の小羊を表します——、ご自分の全部をわたしたちのために使ってくださいるんだ。そういう神様のご計画を短い言葉で表していると言えます。それが今日、年間第2主日、つまりクリスマスのシーズンが終わって、これから1年間を通してイエス様のその恵みっていうことをもう一度味わい直す教会の新しいサイクルが始まった時にあたって、その神様のご計画全体を表す言葉が洗礼者ヨハネの言葉として出てくるわけですけども、それをわたしたちがもう一回聞く、聞くだけじゃなくて、自分がそのご計画の中のどこにあるのかっていうことをもう一度考え直すように招かれていると思うんです。

先ほど「低い、高い」って言いましたが、それはもちろん^{ひゅ}比喩的な意味であって、低いっていうのは、自分自身が本来この世に恵みをもたらす、そういう者であるのに、そうではない、自分の関心の中だけとか、あるいは自分っていう者はそういう他の人のために何か安心を与えたり希望を与えたり喜びを与えたりする、そんなことができるような者ではないんだと思い込んでしまう。そういう意味で、恵みの与え主あるいはその仲介者として神様は一人ひとりをお造りになったけど、それを低く見積もってしまうっていう意味です。

もっと高い可能性と言えば、何かスポーツとか勉強ができるようになるということよりは——繋がってるかもしれませんが——自分が周りの人にいろんなものをもたらしことはできるんだという、そういう意味での神様への近さ、そこへ招いていられし、イエス様が連れていってくださるんだって信じてるのがキリスト教ですけど、それは何も大げさな、あるいは目に見えない観念的な世界っていうことだけではなくて、わたしたちは毎日の生活の中で色々——言葉遣いであったり態度であったり、表情とか、そういうことが——自分が今その瞬間に選択していることが本当に自分にとってそれしかできないことなのかっていうことをもう一度考えてみるならば、どんな場合においても——いつも出会ってる家族とか、あるいは町でその時だけ出会う、一瞬だけすれ違う人に対してかもしれない——その時に自分ができるいろんな選択の中で最悪のことを選択してないだろうか、あるいはもっと周りに安心感や喜びをもたらすような言葉遣いとか表情とか、あるんじゃないかっていうことの気づきを、いつもイエス様との対話の中でわたしたちは気づかせていただくと同時に——それがあある意味では回心の歩みです——、その力をイエス様ご自身が絶えずわたしたちの中に注ごうとされてるんだって、そういう意味で低いところに留まろうとするアヒル的なわたしたちをもっと高みへと連れて行こうとしている——それは強制的にではないんです。絵が表現してるのはなんか強制的に追いかけて回して連れていくみたい。でもそうではない——本当は心を開くならばいつでもイエス様がそこにいるっていうことをわたしたちは信じていると思います。

今日、年間の最初の日曜日にあたって、また改めて——心を改めるきっかけって何度も何度もあるわけですけども——イエス様がわたしたちのために全部を与えてくださるし、招いてくださる。その神様がお造りになった自分自身にもっともっと出会って、その可能性が発揮できる。それは小さなことから——大きなことはその積み重ねですね——、心の中にイエス様との歩みを見出すことができます。

小さなことの中にイエス様との歩みを見出すことができ、その恵みによって歩んでいけますように、このごミサを通して恵みを改めて願い合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>